

## 宗教教育考

### —浄土真宗の教義とその表現方法について— (二)

小池 秀章

#### はじめに

当研究は、平成二十三年度研究助成によって行った「宗教教育考—浄土真宗の教義とその表現方法について—(二)」の続編である。

宗教教育を実践する上での研究課題は多々あるが、まず、浄土真宗の教義の表現方法を確立することを研究の目的とする。具体的には、拙著『高校生からの仏教入門』においてまとめた、第三章の二「親鸞聖人の教え」の部分について、その出拠を明らかにし、教義的根拠を示す。そして、その教義を高校生に理解させるために、どのような表現をとったのか。その注意点やポイントを明らかにする。

尚、平成二十三年度は、「1. 真実の教」と「2. 阿弥陀仏」の部分についての研究を行ったが、平成二十五年度は、

「3. 本願」と「4. 念仏」の部分についての研究を行う。

## 第一章 本願

### 第一節 阿弥陀仏の願い

#### 一・浄土真宗（阿弥陀仏の本願によって救われる教え）

浄土真宗の教義の根本は、阿弥陀仏の本願にある。親鸞において浄土真宗とは、教団としての宗名ではなく、阿弥陀仏の本願によって救われる教えのことである。『親鸞聖人御消息』に

「選択本願は浄土真宗なり（『註釈版聖典』七三七）  
とあり、『教行信証』『教巻』の標挙に

大無量寿経 真実の教 浄土真宗（『註釈版聖典』一三四）

とある。そして、「教巻」の本文に、

それ真実の教を顕さば、すなはち『大無量寿経』これなり。（中略）ここをもつて如来の本願を説きて経の宗致とす（『註釈版聖典』一三五）

とあるように、『大無量寿経』に説かれた本願の教えこそ、真実の教であり、浄土真宗なのである。

#### 二・因本の願・根本の願

本願の本には、因本と根本の二義がある。

因本の願とは、因位の時の願いという意味で、仏(果位)が菩薩(因位)の時におこした願いのことである。この願いは、その願いが完成しなければ仏に成らないという誓いをともなっているもので、誓願ともいう。

更に、菩薩の願について、あらゆる菩薩に共通する総願と、それぞれ固有の別願とがある。総願とは、具体的には、四弘誓願のことで、衆生無辺誓願度(限らない衆生をさとりの岸に渡そうという誓願)、煩惱無尽誓願断(尽きることのない煩惱を断とうという誓願)、法門無量誓願字(無量の教えを学ぼうという誓願)、仏道無上誓願成(この上ないさとりの道を成就しようという誓願)の四つである。

別願は、釈迦仏の五百願、葉師如来の十二願、阿弥陀仏の四十八願が代表的である。法然の教えを承けた親鸞のいう本願とは、もちろん、阿弥陀仏の四十八願のことである。法然の『選択本願念仏集』に

わたくしにいはいはく、一切の諸仏のおの総別二種の願あり。「総」といふは四弘誓願これなり。「別」といふは釈迦の五百の大願、葉師の十二の上願等のこときこれなり。いまこの四十八の願はこれ弥陀の別願なり。(『七祖篇』一一〇二)

とあるのがそれである。

次に、根本の願とは、衆生救済のための根本となる願という意味で、阿弥陀仏の四十八願の中、特に第十八願のことを言う。法然は阿弥陀仏が衆生救済のために本願の中で念仏を選び取ったということで、選択本願とも言う。『仏説無量寿経』に説かれる第十八願を具体的に挙げると、次の如くである。

たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心信樂して、わが国に生ぜんと欲ひて、乃至十念せん。もし生ぜずは、正覚を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とをば除く。(『註釈版聖典』一八)

設我得仏 十方衆生 至心信樂 欲生我国 乃至十念 若不生者 不取正覚 唯除五逆 誹謗正法(『原典版

この第十八願をどのように現代語に訳するかということは、大変重要な問題である。親鸞は、『尊号真像銘文』に、次のように解説している。

「設我得仏」といふは、もしわれ仏を得たらんときといふ御ことばなり。「十方衆生」といふは、十方のよろづの衆生といふなり。「至心信樂」といふは、「至心」は眞実と申すなり、眞実と申すは如来の御ちかひの眞実なるを至心と申すなり。煩惱具足の衆生は、もとより眞実の心なし、清浄の心なし、濁悪邪見のゆゑなり。「信樂」といふは、如来の本願眞実にましますを、ふたごころなくふかく信じて疑はざれば、信樂と申すなり。この「至心信樂」は、すなはち十方の衆生をして、わが眞実なる誓願を信樂すべしとすすめたまへる御ちかひの至心信樂なり、凡夫自力のころにはあらず。「欲生我國」といふは、他力の至心信樂のころをもつて安樂浄土に生れんとおもへとなり。「乃至十念」と申すは、如来のちかひの名号をとなへんことをすすめたまふに、遍数の定まりなきほどをあらはし、時節を定めざることを衆生にしらせんとおほしめして、乃至のみことを十念のみなにして誓ひたまへるなり。如来より御ちかひをたまはりぬるには、尋常の時節をとりて臨終の称念をまつべからず、ただ如来の至心信樂をふかくたのむべしとなり。この眞実信心をえんとき、撰取不捨の心光に入りぬれば、正定聚の位に定まるとみえたり。「若不生者不取正覚」といふは、「若不生者」はもし生れずといふみことなり、「不取正覚」は仏に成らじと誓ひたまへるみのりなり。このころはすなはち至心信樂をえたるひと、わが浄土にもし生れずは仏に成らじと誓ひたまへる御のりなり。(『註釈版聖典』六四三〜六四四)

これに依つて、次のように現代語訳を行った。

私が仏になるとき、すべての人々が、私の救いが眞実であると疑いなく受け入れ、私の国(浄土)に生まれ

ると思つて、わずか十回でも念仏して、もし生まれることができないようなら、私はさとりを開きません。ただし、五逆罪を犯したり、仏の教えを誘うものだけは除かれます。(一七四〜一七五) (以下、太字は拙著『高校生からの仏教入門』の本文であり、引用箇所は頁数のみ記す。また傍線がある場合は当論文に於いて書き加えたものである。)

ただし、最後の「唯除の文」について親鸞は、『尊号真像銘文』にて、次のように述べている。

「唯除五逆誹謗正法」といふは、「唯除」といふはただ除くといふことばなり、五逆のつみびとをきらひ、誹謗のおもきとがをしらせんとなり。このふたつの罪のおもきことをしめして、十方一切の衆生みなもれず往生すべしとしらせんとなり。(『註釈版聖典』六四四)

これにあるように、「ただ除く」という言葉は、この二つの罪(五逆罪・誹法罪)の重いことを知らせて、回心させることによつて、すべての人々が往生できると知らせようとしてされているのである。

### 三、法蔵説話

次に、本願を理解する上で重要になってくるのが、法蔵説話である。

『仏説無量寿経』には、次のように説かれています。

昔、あるところに一人の国王がいました。国王は、世自在王仏の説法を聞いて感動し、自らもさとりを目指したいと思ひ、国王の位を捨て出家して、一人の修行者(菩薩)となりました。名を、法蔵菩薩と言いました。そして、五劫という長い間、思惟して、四十八の誓願(四十八願)を建てました。それは、いずれも『私が仏になるとき、○○できないようなら私はさとりを開きません。』というものです。中でも、十八番目の願い(第

十八願)には、『すべての人を必ず救う』と万人の救済が誓われているので、根本的な願ということでは本願と呼ばれています。

その後、法蔵菩薩は兆載永劫という長い間、修行して、ついに阿弥陀仏という仏になりました。それは、今からおよそ十劫も昔のことです。〔註釈版聖典〕二一〇二八頁参照(一七二一―一七三)

とあるのがそれである。この法蔵説話をどのように受け取るべきか。結論的に言えば、単なる作り話ではなく、また、真実を表す為に人間が創り出した譬喩的象徴的物語でもない。真実なる世界から真実を知らせる為に、物語として現れてくださったものであると受け取るべきである。譬喩的象徴的表現は、人間の側から、人間が理解出来るように、人間の理解の枠組みの中に組み入れて理解するということであり、そのような理解では、決して法蔵説話の真実は明らかにはならない。真実なるものは、私の理解の枠組みを破ってくれるものでなくてはならない。よって、「私から真実への方向」ではなく、「真実から私への方向」、つまり、真実の顕現体として法蔵説話を受け取らなければならぬのである(これは、阿弥陀仏を、「真実を象徴的に表した仏さま」ではなく、「真実の世界から真実を知らせる為に人格的に現れてくださった仏さま」と表現したことと同様である)。釈尊がさとした真実、それは、まさに阿弥陀仏の本願として私たちに届くのである。そして、それは同時に、阿弥陀仏とはどういう仏さまかということを表すものであるのである。それを、

釈尊は、さとの内容(真実)を、「すべての人を必ず救う」という阿弥陀仏の願い(本願)として説いてくださいました。

阿弥陀仏という仏さまは、肉体を持った実体的な仏さま(歴史上の人物)ではありませんが、どのような仏さまかということが、ひとつの物語として説かれています。(一七二)

と表現した。そして、結論的には、

以上が「法蔵説話」と呼ばれているものですが、これは単なる作り話ではなく、真実の世界が物語として現れてくださったものだ、受け取ったらいいでしょ。人は理論では救われません。物語のように人格的に説かれて、はじめてその人の心に響き、救いとなるのです。

自己の願いをかなえることばかりを追い求め、自他ともに傷つけ、迷い苦しんでいる私たちが、阿弥陀仏の願い（本願）に出遇うことによって、自らの愚かさに気づかされると同時に、正しい道に導かれ育てられていくのです。（一七三）

と、真実が法蔵説話のように人格的に顕現することによって、私たちの心に届き、救いとなるということ、そして、浄土真宗とは、その法蔵菩薩の願（本願）によって救われる宗教であるということを示した。

#### 四 四十八願の見方

さて、四十八願の見方を考察すると、淨影寺慧遠は、撰法身の願（仏身に関する願い）〈十二・十三・十七願〉、撰浄土の願（浄土に関する願い）〈三十一・三十二願〉、撰衆生の願（衆生の救済に関する願い）〈残りの四十三願〉の三つに分けた。『無量寿経義疏』卷上に、

有四十八願義三文別有七義要三者一撰法身願二撰浄土願三撰衆生願四十八中二十三及第十七是撰法身第三十  
一第三十二是撰浄土餘四十三是撰衆生（『浄全』第五卷二七）

とあるのがそれである。

善導・法然は、四十八願は、第十八願におさまると見ていた。善導の『観経疏』「玄義分」に

法蔵比丘、世饒王仏の所にましまして、菩薩の道を行じたまひしとき、四十八願を發して、一々の願にのたまはく、『もしわれ仏を得たらんに、十方の衆生、わが名号を称して、わが国に生ぜん願せん、下十念に至るまで、もし生ぜずは正覚を取らじ』(意)と。(『七祖篇』三三二六・『註釈版聖典』三六四)(真仏土卷「引用」)とある。法然も、阿弥陀仏の四十八願の中、第十八願に基づいて念仏往生の法義を打ち立てた。これを一願建立という(善導もこの立場に立つ)。法然の『選択本願念仏集』に、

弥陀如来、余行をもつて往生の本願となさず、ただ念仏をもつて往生の本願となしたまへる文。

『無量寿経』の上ののたまはく、「たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、心を至し信樂して、わが国に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、もし生ぜずといはば、正覚を取らじ」(第十八願)と。(『七祖篇』一一〇一〜

二〇二)

とあるのがそれである。

それを承けた親鸞は、阿弥陀仏の四十八願の中、第十八願に基づいて打ち立てられた念仏往生の法義を、第十七願・第十八願・第十一願・第十二願・第十三願の眞実五願に開き示した。これを一願建立に対して、五願開示という。つまり、まとめれば第十八願、開けば眞実五願となるのである。第十八願文に眞実五願を当てはめれば、「至心信樂欲生我国」が第十八願、「乃至十念」が第十七願、「若不生者」が第十一願、「不取正覚」が第十二・十三願となる。

また親鸞は、『教行信証』の各巻の標拳に願名を挙げてゐる。「教卷」には『大無量寿経』と經典を挙げてゐるが、「行卷」には「諸仏称名の願」(第十七願)、「信卷」には「至心信樂の願」(第十八願)、「証卷」には「必至滅度の願」(第十二願)、「眞仏土卷」には「光明無量の願」(第十二願)・「寿命無量の願」(第十三願)とあるのがそれである。これは、浄土眞宗の法義が、眞実五願によって成り立っていることを示すものである。このように願によって法義を立てるこ



とを「取願立法」という。

更に、方便の巻「化身土巻」には、「至心発願の願」(第十九願)、「至心回向の願」(第二十願)が標拳として挙げられているが、これは、親鸞が、衆生往生の因を誓う三願(第十八・十九・二十願の生因三願)の中に、真仮(真実と方便)を見ていかれたことを表している。つまり、親鸞は、第十八願を真実の願、第十九願・第二十願を方便の願と見ていかれたのである。

親鸞は、この三願について、第十九願から第二十願、そして、第十八願へと転入するということを述べられている。三願転入と呼ばれているものである。『教行信証』「化身土巻」に、

ここをもつて愚禿積の鸞、論主の解義を仰ぎ、宗師の勸化によりて、久しく万行諸善の仮門を出でて、永く双樹林下の往生を離る。善本徳本の真門に回入して、ひとへに難思往生の心を発しき。しかるに、いまことに方便の真門を出でて、選択の願海に転入せり。すみやかに難思往生の心を離れて、難思議往生を遂げんと欲す。

果遂の誓(第二十願)、まことに由あるかな。〔註釈版聖典〕四一三

とあるのがそれである。「万行諸善の仮門」とは、自力諸行往生を誓う第十九願(要門)のことで、「双樹林下の往生」とは、第十九願の往生のことである。「善本徳本の真門」とは、自力念仏往生を誓う第二十願(真門)のことであり、「難思往生」とは、第二十願の往生のことである。「選択の願海」とは、他力念仏往生を誓う第十八願のことであり、「難思議往生」とは、第十八願の往生のことである。つまり、第十九願から第二十願へ回入し、第二十願から第十八願へと転入するというのであるが、これは、親鸞の求道の歷程のことであると言われている。

この文は、我々にも三願を転入するように勧めているのではなく、自力諸行往生を目指す者も、自力念仏往生を目指す者も、真実へと導かんとする阿弥陀仏の慈悲のはたらき(方便)を表すものであり、方便の教えを捨てて、

真実の教え（他力念仏の教え）に入ることを勧められているのである。

## 第二節 他力本願

「他力本願」という言葉は、一般的にもよく知られている言葉であるが、多くの場合、誤解された状態で使われている。

「他力本願」「悪人正機」「往生浄土」は、浄土真宗の教えの三本柱とも言われており、たいへん重要な教義ですが、多くの人々に誤解されているのも事実です。

「他力本願ではダメだ。自力でなければ」と言った時、多くの場合は、「自分は何もしないで、他の力によって希望通りになることを願っているようではダメだ。自分で努力してつかみ取らなければ」ということを、意味しているようです。ところが、これは「他力本願」の本来の意味とは、全く違います。（一七六）

と、まず現状を把握し、次に「他力本願」という言葉の意味を明らかにした。

「他力本願」の「他力」とは、「阿弥陀仏のすべての人を救う力・はたらき」のことです。「本願」とは、「阿弥陀仏のすべての人を必ず救うという願い」のことです。ただし、ただ願っているだけではなく、願いを実現する力・はたらきを持っているので、「本願力」とも言います。親鸞聖人は、「他力といふは如来（阿弥陀仏）の本願力なり」（『教行信証』『註釈版聖典』一九〇頁）と示してくださっています。つまり、「他力本願」とは、「阿弥陀仏の力であり、それは、すべての人を必ず救うと願い、願い通りに救うはたらき」のことなのです。（一七六）とあるのがそれである。他力という言葉は、自力という言葉と共に使われることも多く、言葉の意味を明らかにし

ても、日常の中では、間違った意味で使われることが多い。「受験勉強は他力ではだめ、自力でなければ」などといったものが典型的な例である。このような間違いを招く原因の一つは、日常生活の行為について自力・他力を語っているといるところにある。

浄土真宗（仏教）で自力・他力を語る時には、日常生活での人間の行いに関して、自力・他力を述べているのではありません。仏のさとりを求める（真実を体得する）ということに関して、述べているのです。（一七六～一七七）

とあるように、日常生活の行為が自力か他力かという問題ではなく、仏のさとりを求めるといふ仏道修行の上で語られるものなのである。

そして、もう一つ注意しなければならないのは、仏道修行の上で語られる自力・他力は、単に「自分の力」「仏の力」という意味ではなく、自力とは「自分の力・行いに価値を認め、当てること」<sup>(註①)</sup>であり、他力とは、「阿弥陀仏をたのみにすること、そのはたらきを受け入れること（信心）」の意味であるということである。

この場合、自力とは、「自分の力・行い」というより、「自分の力・行いに価値を認め、当てること」、他力とは、「阿弥陀仏の力・はたらき」であり、「阿弥陀仏をたのみにすること、そのはたらきを受け容れること」です。

さとりを求めるといふことに関して、私の行いは当てるにならない、私の力ではどうしようもないということを見抜き、はたらき続けてくださっているのが阿弥陀仏であり、そのはたらきが他力なのです。（一七七）とあるのがそれである。このことは、『親鸞聖人御消息』に、

まづ自力と申すことは、行者のおのの縁にしたがひて余の仏号を称念し、余の善根を修行してわが身をたのみ、わがはからひのころをもつて身・口・意のみだれころをつくるひ、めでたうしなして浄土へ往生せん

とおもふを自力と申すなり。また他力と申すことは、弥陀如来の御ちかひのなかに、選択摂取したまへる第十八の念仏往生の本願を信樂するを他力と申すなり。如来の御ちかひなれば、「他力には義なきを義とす」と、聖人（法然）の仰せごとにてありき。義といふことは、はからふことばなり。行者のはからひは自力なれば義といふなり。他力は本願を信樂して往生必定なるゆゑに、さらに義なしとなり。（『註釈版聖典』七四六）

とあることから明らかである。そして、「他力には義なきを義とす」という法然の言葉を示されている。義とは、「はからい」ということで、自力のことである。つまり、他力は、義（自力のはからい）がないのを、義（本義）とするということである。

更に、もう一つ押さえておかなければならないことがある。それは、「他力本願」について、「他力とは、他人の力ではなく、阿弥陀仏の力である」という従来の説明では、不十分であるということである。その説明では、他人の力ではないという誤解は解けても、どのような力かがはっきりしない。一般の人の感覚では、「他力とは、神さまの力である」というのと何ら変りがない。よって、阿弥陀仏の力とはどのような力であるのかを明らかにしなければならぬ。

「他力」とは、「阿弥陀仏のすべての人を救う力」であるといっても、阿弥陀仏という実体的な全知全能の絶対者がいて、私を救ってくれるというようなものではありません。私を救うはたらきの他に阿弥陀仏が存在するわけではありません。真実のあり方から遠ざかっている愚かな私が、真実の方向へ導かれていく、そのはたらしきそのものが阿弥陀仏であり、他力なのです。（一七七〜一七八）

とあるのがそれである。

また、他力の受け取りの誤解について、よくあるもう一つの例が、「私を生かしてくれている私以外の多くのもの

の力・はたらき」を他力と受け取るものである。

他力を、「私を生かしてくれている私以外の多くのもの力・はたらき」と受け取って、「他力のお蔭で」と喜んでいる人もいます。これも内容的には大切な受け止め方ですが、浄土真宗の他力とは違います。多くのもののお蔭で生かされているにも関わらず、それに気づいていないこの私を、その真実に目覚めさせてくれるはたらきが、阿弥陀仏のはたらきであり、他力なのです。(一七八)

とあるのがそれである。「私を生かしてくれている多くのものはたらき」と「他力」の関係を言えば、「私を生かしてくれている多くのものはたらき」は「他力」ではなく、「多くのものはたらきによって生かされている」ということを教えてくれるはたらきが「他力」なのである。

最後に、「他力本願」の意味が誤解される理由として、「他力本願」の生き方が、自分では何もしないで、他の力にたよって生きるという間違ったイメージがあるところにある。よって、「他力本願」の生き方を明らかにする必要がある。

「他力本願」の生き方とは、自分で何もせず他に頼る生き方ではなく、自己中心の心から離れられず真実に背いた生き方をしている私が、阿弥陀仏のはたらきに出会うことによって、自らの愚かさにも気づかされると同時に、少しずつではあるけれど、真実の生き方へと方向転換されていくような生き方なのです。(一七七)

とあるのがそれである。

## 小結

以上、「本願」について述べてきたが、高校生が耳にする単語としては、「本願」ではなく、「他力本願」の方が多

いであろう。そして、一般の人が誤解しているのと同じく、「他力本願」は、自分で何もせず、他に頼ることであると理解している場合が多い。これらの誤解を解くためには、「他力」とは、他の力ではなく、阿弥陀仏の力であるという説明で終わることなく、その力とは、私たちを真実に導いてくださるはたらきであるということを明らかにすることが必要であろう。そして、そのはたらきこそ、すべての人を救うという「本願（本願力）」のことであり、「他力」なのである。

## 第二章 念仏

### 〈名号・信心・称名（念仏）〉

次に念仏についてであるが、従来の真宗要論・真宗概論では、「名号↓信心↓称名（念仏）（以下、称名と念仏を同意で用いる）」という順番で、その項目が挙がることが多い。この場合、名号には私を救うすべての徳が収まっております、私を救うはたらきがあると言い、それを全徳施名・名体不二という言葉で説明している。そして、その名号が私の心に届いたのが信心であり、口から出たのが念仏である。つまり、念仏とは、信後の報恩感謝の念仏（称名報恩）であるとする。

これは間違っているが、このような説明は「名号という何か実体的な存在があつて、それが私に届き、その時、ありがとうの念仏を称える」と単純に受け取り、名号のはたらきは南無阿弥陀仏の念仏となつて私に届くにも関わらず、「何も受け取っていないのに念仏する意味がわからない、念仏する気になれない」となりかねない。南無阿弥陀仏と念仏するところに、名号の徳も称名報恩の意も明らかになるのである。よって、「名号↓信心↓称名（念仏）」

という説き方ではなく、念仏の二つの側面として、従来、名号の徳として説いていた面（喚び声）と、称名報恩の面（ありがとうの念仏）を、説くという形にした。

### 第一節 名号（喚び声）

#### 一・六字釈

南無阿弥陀仏の名号について、

「南無阿弥陀仏」とは仏さまの名前であり、これを名号と言います。「南無」とは、インドの「ナマス」という言葉が変化した「ナモ」の音写で、もともと「尊敬する」とか「依りどころにする・たのみにする」という意味があります。よって、普通は「南無・阿弥陀仏」とは、「阿弥陀仏を依りどころにします・たのみにします」という意味になります。ところが、親鸞聖人は、「南無」とは、「たのみにします」という私からの言葉ではなく、「我をたのめ、必ず救う」という阿弥陀仏の「喚び声」だと言われているのです。

と述べている。これは、「六字釈」によっている。

まず、善導は『観経疏』『玄義分』に六字を釈し、

「南無」といふはすなはちこれ帰命なり、またこれ発願回向の義なり。「阿弥陀仏」といふはすなはちこれその行なり。この義をもつてのゆゑにかならず往生を得。（『七祖篇』三三五・『註釈版聖典』一六九）（「行巻」引用）  
という。善導の六字釈は、撰論家の人々が『観経』下々品の念仏には、浄土往生を願うという願はあつても行がない（唯願無行）ので、即時に往生できないといい、別時意（ずつと後に得る利益を即時に得られるかのよう）に説く説き方の方便説であると主張したことに対して、念仏には願行具足しているので、即時に往生できるということを明らか

にしたものである。

親鸞の六字釈は、善導の六字釈を承けたものではあるが、願行具足という観点とは違っている。『教行信証』「行巻」には、

しかれば南無の言は歸命なり。歸の言は、「至なり、」また歸説なり、説の字は、「悦の音なり。」また歸説なり、説の字は、「税の音なり。悦税二つの音は告なり、述なり、人の意を宣述するなり。」命の言は、「業なり、招引なり、使なり、教なり、道なり、信なり、計なり、召なり。」ここをもつて歸命は本願招喚の勅命なり。発願回向といふは、如來すでに発願して衆生の行を回施したまふの心なり。即是其行といふは、すなはち選択本願これなり。必得往生といふは、不退の位に至ることを獲ることを彰すなり。『経』（大経）には「即得」といへり、釈（易行品）には「必定」といへり。「即」の言は願力を聞くによりて報土の真因決定する時剋の極促を光闡するなり。「必」の言は「審なり、然なり、分極なり、」金剛心成就の貌なり。（『註釈版聖典』一七〇）

とある。これは、約仏釈と呼ばれるもので、仏の救済のはたらきを仏の側から顕す解釈である。要点を言えば、南無というのは、歸命ということであり、それは、本願招喚の勅命、すなわち、弥陀の喚び声だということである。ここでは、南無の二字の解釈になっているが、南無阿弥陀仏の六字に通じるものである。

親鸞には、別の側面から釈するものもある。『尊号真像銘文』には、

「言南無者」といふは、すなはち歸命と申すことばなり、歸命はすなはち釈迦・弥陀の二尊の勅命にしたがひて召しにかなふと申すことばなり、このゆゑに「即是歸命」とのたまへり。「亦是發願回向之義」といふは、二尊の召しにしたがうて安樂浄土に生れんとねがふころなりとのたまへるなり。「言阿弥陀仏者」と申すは、「即是其行」となり、即是其行はこれすなはち法藏菩薩の選択本願なりとしるべしとなり、安養浄土の正定の業因



なりとのたまへるころなり。「以斯義故」といふは、正定の因なるこの義をもつてのゆゑにといへる御ころなり。「必」はかならずといふ、「得」はえしむといふ、「往生」といふは浄土に生るといふなり。かならずといふは自然に往生をえしむとなり、自然といふは、はじめてはからはざるころなり。『註釈版聖典』六五五とある。これは、約生釈と呼ばれるもので、衆生の側から顕す解釈である。これによると、南無といふのは、帰命ということであり、それは、釈迦・弥陀の仰せのままにその招きに従うという言葉だといふのである。この南無の二字の解釈も、当然、南無阿弥陀仏の六字に通じるものである。<sup>(註)</sup>

## 二. 大行(真実の行)

次に、親鸞が念仏を真実の行であるとしていることを考察する。

親鸞聖人は、南無阿弥陀仏と称えることが、真実の行だと言われていますが、それは、私の行いについて言っているわけではありません。私の行いほどあてにならないものはありません。南無阿弥陀仏と称えているのは私ですが、阿弥陀仏の救いのはたらきが私に届き、南無阿弥陀仏の言葉となつて現れているのです。私が称えているままが、阿弥陀仏がはたらいてくださっている姿なのです。つまり、阿弥陀仏のはたらきだからこそ、真実の行と言えるのです。(一八一)

とあるのがそれである。『教行信証』「行巻」に、

つつしんで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行とはすなはち無碍光如来の名を称するなり。この行はすなはちこれらもろの善法を撰し、もろもろの徳本を具せり。極速圓滿す、真如一実の功德宝海なり。ゆゑに大行と名づく。(『註釈版聖典』一四一)

とある。大行（真実の行）とは、無碍光如来の名を称するなりとあるが、南無阿弥陀仏と称えるということである。(註⑧)

「この行はすなはちこれもろもろの善法を摂し、もろもろの徳本を具せり」は量徳、「極速円満す」は用徳、「真如一実の功德宝海なり」は性徳を表すと言われている。つまり、大行とは、真如にかなない、無量の徳をもち、衆生をすみやかに涅槃に至らしめる勝れた行業（おこない）のことである。それゆえ、「真実行」ともいわれるのである。(註⑨)

更に、その行が人間から出てきたものではなく、弥陀の本願から出てきたものであることを明らかにする。

しかるにこの行は大悲の願（第十七願）より出でたり。すなはちこれ諸仏称揚の願と名づく、また諸仏称名の願と名づく、また諸仏咨嗟の願と名づく、また往相回向の願と名づくべし、また選択称名の願と名づくべきなり。

『註釈版聖典』一四一

とあるのがそれである。大行は、本願、厳密には第十七願より出てきたものであるとするのである。『仏説無量寿経』の第十七願文を具体的に挙げれば、次の如くである。

「たとひわれ仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して、わが名を称せずは、正覚を取らじ。」  
(二八)

つまり、大行（真実の行）である念仏は、確かに私が称えているのですが、それは私の自己中心の心から出てきたものではなく、阿弥陀仏の大きな願い（本願）から出てきたものであり、阿弥陀仏から回向された行なのである。

### 三、勝劣・難易の義

尚、なぜ本願の中で念仏が選択されたかということについては、法然の『選択本願念仏集』に勝劣の義と難易の義によって応えている。

なんがゆゑぞ、第十八の願に、一切の諸行を選捨て、ただひとへに念仏一行を選択して往生の本願となしたまふや。答へていはく、聖意測りがたし。たやすく解することあたはず。しかりといへどもいま試みに二の義をもつてこれを解せば、一には勝劣の義、二には難易の義なり。初めの勝劣とは、念仏はこれ勝、余行はこれ劣なり。所以はいかんとならば、名号はこれ万徳の帰するところなり。しかればすなはち弥陀一仏のあらゆる四智・三身・十力・四無畏等の一切の内証の功德、相好・光明・説法・利生等の一切の外用の功德、みなことごとく阿弥陀仏の名号のなかに撰在せり。ゆゑに名号の功德もつとも勝となす。余行はしからず。おのおの一隅を守る。ここをもつて劣となす。〔七祖篇〕 二二〇七)

とあるのがそれである。勝劣の義とは、念仏を勝、余行を劣とするのである。その理由として、名号は万徳の帰するところである（「所帰万徳の名号」ということを挙げる。そして、難易の義については、

次に難易の義とは、念仏は修しやすし、諸行は修しがたし。（中略）念仏は易きがゆゑに一切に通ず。諸行は難きがゆゑに諸機に通ぜず。しかればすなはち一切衆生をして平等に往生せしめんがために、難を捨て易を取りて、本願となしたまへるか。〔七祖篇〕 二二〇八～二二〇九)

とある。念仏は易で諸行は難である。一切の衆生を平等に往生させるために、難である諸行を捨て、易である念仏を取つて、本願の中で誓われたのである。そして、結論として、

しかればすなはち弥陀如来、法蔵比丘の昔平等の慈悲に催されて、あまねく一切を撰せんがために、造像起塔等の諸行をもつて往生の本願となしたまはず。ただ称名念仏一行をもつてその本願となしたまへり。〔七祖篇〕

二二〇九～二二一〇)

というのである。

## 第二節 称名報恩（ありがとうの念仏）

一般の人、特に高校生には、「称名」「名号」といった言葉は馴染みがないが、「念仏」という言葉は知っている。そこで、念仏を次のように規定した。

念仏とは、文字通り、もともとは「仏を念ずること」、つまり「仏を心に思い浮かべること」が中心でした。しかし、現在、念仏と言った場合は、「仏の名（名号）を称える」という称名念仏の意味で使われることが、ほとんどです。法然聖人・親鸞聖人の伝えてくださった念仏も、称名念仏のことです。浄土真宗において念仏とは、称名（仏の名を称えること）、つまり「南無阿弥陀仏と称えること」です。（一八二）

とあるように、念仏とは、「南無阿弥陀仏と称えること」であるが、その心のあり方によって、自力の念仏と他力の念仏に分かれる。

「南無阿弥陀仏」という言葉は、もともと「私が、阿弥陀仏をたのみにします」という意味で、たくさん称えることによって救いを得ようというものでした。これを自力の念仏と言います。しかし、親鸞聖人の説かれた念仏は他力の念仏であり、たくさん称えて、その見返りとして救いが与えられるというものではありません。南無阿弥陀仏と称えることは私の行いではあるけれど、実は、仏のはたらきが私の上に現れたような行いなのです。称えているままが、仏がはたらいっている姿なのです。南無阿弥陀仏の言葉を通して、限りないひかりといのちの世界に触れるのです。それは、教えを聞くことと一緒にあると言ってもよいでしょう。（一八二）

とあるのがそれである。そして、

私が一生懸命念仏して、その私の行いの見返りとして、浄土というさとりの世界に生まれさせていたただくのではありません。仏のはたらきを疑いなく受け容れる信心によって、浄土に生まれさせていたただくのです。これを「信心正因（信心が浄土に生まれる正しき因）」と言います。

では、念仏は何かと言えば、仏さまに対してありがとつという、報恩感謝の意味になります。これを「称名報恩」と言います。なぜ称名が報恩になるかというと、念仏は、仏さまの願いにかなった行為だからです。「信心正因・称名報恩」は、浄土真宗の大切な教義の一つです。称名正因ではないことに注意しましょう。

つまり、念仏とは、私を真実に導く仏さまの喚び声であると同時に、私の側から言えば、ありがとつこの報恩感謝の意味になります。(一八三)

と、信心正因・称名報恩の義を明らかにした。

称名報恩の義に関しては、『教行信証』「行巻」の「正信偈」に、

ただよくつねに如来の号を称して、大悲弘誓の恩を報ずべしといへり。

(唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩) (『註釈版聖典』二〇五)

とあるのがそれである。なぜ称名が報恩になるかということについて、「仏さまの願いにかなった行為だからです」と述べているが、もう少し教義的に述べれば、仏徳讃嘆の徳と常行大悲の徳を備えているからであると言える。仏徳を讃嘆するところに、その仏徳が衆生に届き衆生を教化するのである。煩惱具足の凡夫が、本当の意味で仏徳を讃嘆することは難しいが、『尊号真像銘文』に、

南無阿弥陀仏をとなふるは仏をほめたてまつるになるとなり。(『註釈版聖典』六五五)

とあるように、南無阿弥陀仏と称えることは、仏徳讃嘆になるのである。

また、称名には、如来の大悲を十方世界に伝えるはたらきがあるのである。これを常行大悲（常に大悲を行ずる）という。『正像末和讃』『悲歎述懐讃』に

無慚無愧のこの身にて まことのこころはなけれども

弥陀の回向の御名なれば 功德は十方にみちはまふ（『註釈版聖典』六一七）

とあるのは、称える者に常行大悲の力があるのではなく、弥陀のはたらきである名号が届いた姿が称名であるから、そこに常行大悲のはたらきがあるということを表している。

このように、称名は「ありがとうの念仏」であると同時に、仏徳讃嘆と常行大悲という利他の徳が行ぜられていることになるので、菩薩の報恩行と同じ意味をもつのである。『浄土和讃』『讃弥陀偈讃』に

仏慧功德をほめしめて 十方の有縁にきかしめん

信心すでにえんひとは つねに仏恩報ずべし（『註釈版聖典』五六五）

とあるのは、この意である。

### 小結

以上、名号↓信心↓称名(念仏)という形ではなく、念仏の二つの側面として、従来、名号の徳として説いていた面(喚び声)と、称名報恩の面(ありがとうの念仏)を、説くという形にした。それは名号や称名という言葉よりも、念仏という言葉の方が一般の人にとって、馴染みがあると思われるからである。

更に、現代における伝道、特に高校生などの若い人への伝道ということ考えた時、念仏と言った場合、称名報恩の意よりも、南無阿弥陀仏の念仏は仏さまの喚び声であるという面から説明すべきであろう。<sup>(註⑤)</sup>

そして、「南無阿弥陀仏の念仏は、自らが称えているままが、仏さまの喚び声を聞くことであり、もう少し具体的に言えば、教えを聞くことであるといってもよいであろう。」このような表現をとることによって、はじめて浄土真宗のみ教えや念仏に出遇った人も受け取りやすくなるのではないだろうか。

### おわりに

以上、「本願」と「念仏」について、その出拠を明らかにし、教義的根拠を示した。そして、その教義を高校生に理解させる為に、どのような表現方法が適切か検討してみたが、一つのポイントは、できるだけ高校生が聞いたことのある言葉を使うということにある。ただ、それによって、世間一般に誤解されている意味と混同される危険性はあるが、それを正していく方向に進むべきであろう。

「本願」について語る場合、「他力本願」という言葉を中心に「他力」や「本願」を語るのであるが、誤解されている意味を是正すると共に、「他力とは他の力ではなく阿弥陀仏の力である」という表面的な言葉の意味の説明だけでなく、その内容を詳しく伝える必要があるだろう。そこに「本願」や「他力」の意味も明らかとなり、言葉の誤解も解けるはずである。

「念仏」について語る場合も、「名号」「称名」といった言葉を使いすぎず、できるだけ「念仏」という言葉にその両方の意味を含むという方向で説明した方が理解しやすいであろう。

更に、大谷光真氏が、「浄土真宗では、『念仏を称えれば救われる』よりも、『念仏を称える身になって救われる』という方がしっくりします。念仏を救いの条件としないからです。(『世のなか安穩なれ』七二)と述べているように、

『念仏を称える身になって救われる』のような表現を積極的に使っていくのも大切な方向性であろう。

(註1) 自力とは、「信罪福心」であるとも言われる。信罪福心とは、罪は苦果を招き、福は楽果を招くという、善因楽果 悪因苦果の道理を信じる心のことである。

(註2) 蓮如『御文章』三帖の七には、『南無』の二字は、衆生の阿弥陀仏を信ずる機なり。つぎに「阿弥陀仏」といふ四つの字のいはれは、弥陀如来の衆生をたすけたまへる法なり。このゆゑに、機法一体の南無阿弥陀仏といへるはこのころなり。(『註釈版聖典』一四七)とある。これによると、南無とは、「弥陀をたのみ信心(機)」、阿弥陀仏とは、「必ず助ける(法)」のことであり、その機と法が離れたものではなく一つであるということをし、「機法一体の南無阿弥陀仏」と言われている。

(註3) 「大行とは南無阿弥陀仏と称するなり」と言わず、「大行とは無碍光如来の名を称するなり」と言われたのは、曇鸞の『論註』下巻の讚嘆門釈によっているからであり、それについて、梯實圓氏は、三つの理由を挙げている。

- ① 本願の念仏は、真実の意味において仏徳をたたえる讚嘆の行(如実讚嘆)であるということが明らかになるから。
  - ② 尽十方無碍光如来という名は、それをいただいて称える人々の無明(疑惑)の闇を破り、往生成仏の願いを満足せしめるというすばらしいはたらきをもっていて、よく成仏の因となるといういわれが明らかになるから。
  - ③ 「南無阿弥陀仏と称える」といったのでは、それが自力念仏か他力念仏かの区別がつかないが、『往生論註』の讚嘆門の釈によることによって、大行といわれる称名は名号のいわれにかなって称える如実の称名であり、三信(一心・信心)を具えている他力の称名であるということが明確になるから。
- (『聖典セミナー』教行信証「教行の巻」一七六 参照)

(註4) 真実行は、私の行いではなく、仏のはたらきである。それは、名号にその功德があるからだという場合がある。『一念多念証文』に、「真実功德と申すは名号なり。一実真如の妙理、円満せるがゆゑに、大宝海にたとへたまふなり。」(『註釈版聖典』六九〇)



とあるのがそれである

(註5) 大谷光真氏は次のように述べている。「私は現代人には、「南無阿弥陀仏」は感謝のお念仏だと説く前に、阿弥陀さまが私を喚んでいてくださるお喚び声だと伝える方が理解されやすいのではないかと最近感じています。」(大谷光真『浄土真宗のこれから』三三三)。

〈キーワード〉

宗教教育 本願 念仏 表現方法